

勇者に
滅ぼされる
だけの
簡単な
お仕事
です

そのはち

8

AMANO HAZAMA
天野ハザマ

Illustration : ジョンディー

A large black and white illustration featuring several anime-style characters. In the top left, a girl with long dark hair (Ikusarass) and an elf-like girl with pointed ears (Rutee Rigas) stand together. In the top right, two boys (Rokuna and Vermudoll) are shown. In the center, a boy with blonde hair (Kain Stajas) and a boy with dark hair (Ain) are featured. In the bottom right, two girls in maid uniforms (Ichika and Nino) are depicted. The background has a textured, stone-like appearance with decorative borders.

イクスラース

「調和の魔王」を名乗っていた少女。
現在は魔王城に滞在中。

ルーティ・リガス

元勇者パーティの一人。
ジオル森王国の英雄。

ロクナ

魔王城の図書館守護担当。
頭脳明晰な魔人で、
魔王軍参謀役。

ヴェルムドール

異世界レムフィリアの暗黒大陸に
転生した新魔王。勇者率いる人類領域の
侵略に備え、魔族の統一を図る。

カイン・スタジース

聖アルトリス王国のエディウス冒険者学校に
所属する冒険者の卵。

アイン

ロクナの配下にいる諜報部員。

イチカ

ヴェルムドール付のメイドナイト。
無表情かつ冷静沈着。

ニノ

ヴェルムドールに創造
されたメイドナイト。
イチカを敵対視している。

魔王軍

サンクリード

アルテジオ

ゴードイ

ラクター

ファイネル



西方将



北方将



中央将



南方将



東方将

メイド三人娘

クリム

マリン

レモン



聖アルトリス王国の首都、エディウス。

王派と神殿派の権力争いが拮抗^{きっこう}する中でも、住民達の生活には何ら影響がない。

しかし、一部の住民は何となく嫌な雰囲気を感じ、根拠のない不安を感じていた。

利に聡^{さと}く噂や情勢に敏感な商人達の中には国外脱出を考えた者もいたが、ならば何処^{どこ}に逃げればいいのかというのが問題であった。

何処^{どこ}よりも自由で平等といわれるキャナル王国では内乱が長引き、ジオル森王国には魔族が出入りしているという。サイラス帝国では商売の新規参入がなかなか難しく、コネでもなければ拠点を構えるには不向きだ。

あれこれ考えた結果、商人は結局国内に留まり、彼らや商会によって流通も正常な状態を維持していた。

なかでも画期的な商品を開発し続け、国外との取引も活発に行っているティアノート商会は、聖アルトリス王国で一、二を争う商会へと成長を遂げた。

その商会の主の娘であるシャロンには多数の縁談が持ち込まれ、最近王派や神殿派の権力を匂

わせるものも増えてきていた。

一方で、エディウス冒険者学校にもそうした輩の手が伸び、最近では貴族の息子の編入が相次いでいる。

「……ふむ、こうして情報をまとめてみると……実にどうしようもない状況だな」

魔族の国、ザダーク王国の諜報員アインは、手元のメモを見ながら呟く。

王派と神殿派のどちらが主導権を握るかは分からないが、いずれにしても大して違いはないだろう。

神殿派のほうがより過激と思われるが、王派が穏健というわけでもない。

結局は今の状況を維持してもらったほうが、現時点では都合がいいように思える。

ただ問題があるとするならば、両派に担ぎ上げられた聖王アルジュエルと、大神官エルヘイルだ。どちらも公的には沈黙を貫き、さらに警備の厳重な場所にいるため、アインも行動を探ることができない。

仕方がないといえば、仕方がない。魔族には元々諜報活動などという概念すらなかったため、そのための技術は誰も持っていない。

アインとて、もとより持っている能力を活かして、何とか潜入活動をできているに過ぎないのだ。「……ふう」

溜息をついて、夜空を見上げる。

アインが座っているのは、裏通りの空き家の屋根の上だ。

徐々に人が増えてきたとはいえ、エディウスの街の裏通りには未だにこうした空き家が多い。

自然と、アインのような者がいるには丁度いい場所になっているのだ。

「……またか」

何かが上ってくる気配に、アインは再度の溜息をついた。

いつも場所を変えているというのに、毎回何処からともなくやってくる。

「よつと……！ あ、いたいた。こんばんは、アイン」

「お前も飽きない奴だな、カイン。もうアルヴァは出てこないだろうに」

エディウス冒険者学校に通う、カイン・スタジアスだ。

この間までは謎の魔族アルヴァがカインを狙うかのように毎晩出没し、アインもその討伐に協力していた。

それは、ザダーク王国の国王ヴェルムドールの管理下になく、人類領域で不穏な動きを見せるアルヴァを調査するため、そして奴らに狙われるカインの正体を探るためでもあった。

しかし、ある時期を境にしてアルヴァは出てこなくなり、だからカインの優先度はアインの中で下がっていたのだが……そんなことはお構いなしに、カインはアインに絡んでくる。

しかも、現在調査中の案件で女の重要人物に近づこうとすると、高い確率でカインが関係してくるため、彼との接触の機会が一向に減らないのは仕方ないともいえた。

「確かにアルヴァは出てこないけどさ。最近は違うのが出てくるだろ？」

「……物好きな奴だ。お前が狙われているわけでもなかるうに」

ゴ布林アサシン——そう称されるゴ布林達が近頃、エディウスにポツポツと出没している。黒装束を纏い、ゴ布林とは思えぬ身体能力で飛び回るゴ布林アサシン達。

見つけた端からアイン達の諜報部隊が潰しているので大きな騒ぎにはなっていないものの、目の届かない場所では暗殺が遂行されているとも聞く。

奴らの実態は何処かの暗殺組織がゴ布林を取り込んだ結果だとも言われているが、実際のところは不明だ。

「そんなことはないさ。一応僕だって、男爵家の息子だからね」

「地方貴族だろうが。中央の権力争いに何の関わりがある？」

「そ、そりゃそうだけどさ」

そう言っではみたものの、アインは知っている。

エディウス冒険者学校でも一番の有望株、カイン・スタジアス。

地方貴族とはいえ善政を敷く男爵家の息子にして、文武両道。

冒険者の卵とは思えないほどの数々の実績を挙げ、学内の闘技大会でも優勝。しかも、その大会に聖アルトリス王国の第二王女がカインの応援に来ていたというのも有名な話だ。

さらには、ティアノート商会の発展にもカインは貢献しているという。

噂レベルの話ではあるが、そんなカインには叙勲が検討されているらしい。

それを聞いたアインは、カインという有望株を手放さないための王派によるエサ撒きかとも考えたが、カイン本人に聞いてみると何とも微妙な表情をしていた。何かをやらかした自覚はあるらし

いが、いくら聞いても口を割りはしなかった。

「……で、何しに来た」

「んー……アインに会いに、かな？」

それを聞いて、アインはうんざりとした顔をする。

「……お前な、そういうのはシャロンやセイラに言ってやれ。どうせセイラは今夜もお前を探してウロウロしてるだろう？」

「そ、そんなことないと思うけど……ほら、もうアルヴァも出ないし」

露骨な溜息をつきながら、アインはカインから視線を外す。

いないはずがない。

カインが夜にあちこち出歩いているのは、もう公然の事実なのだ。さらに、彼は高い確率で何らかの事件に遭遇する。

常々からカインの力になりたいと言っている冒険者学校の友人セイラが、そんなカインを放っておくはずがないのだ。

今のところ、この近くにはいないようだが……

「それにさ、今日はアインに会いに来たんだ」

「それはさっき聞いた」

「あ、いや。そうじゃなくて、話があるっていうか……」

何やら言いどむカインによく違和感を覚えて、アインは彼に向き直る。

「話？」

「あ、うん」

辺りをキョロキョロするカイン。どうやら他の人間に聞かれたくない話なのだろう。

「心配するな、この付近には誰もいない」

「そ、そっか」

「早く言え。私は暇じゃない」

アインが促すと、カインは躊躇いながらも口を開く。

「えっと……さ。前に将来の話をしたと思うんだけど」

「そうだな」

確かに、聞いた覚えがある。最近選択肢が異常に増えすぎて悩み始めている、と。

確かに、カインの選択肢は無数にあるだろう。貴族、商人、冒険者……時々第二王女とお忍びで会っているところを思えば、ひよつとすると王家に入るとい選択肢もあるのかもしれない。

あるいは、【命の神の加護】を持っているのだから、神官という道だってある。

「僕、やっぱり冒険者になろうと思う」

「そうか」

しかし、その選択肢を実現するのは難しい。各勢力がカインを逃がすまいと動くだろうし、色んな手で枷^{かぎ}をつけようとするのは間違いないのだ。

「どうしてか、聞かないんだ？」

「聞いてどうする。それに、理由なら分かりきっている」

誰かの役に立ちたい。

常々、カインはそんなことを言っていた。

どんな道でも誰かの役には立てる、とアインは言った覚えがあるが……まあ、恐らく冒険者ならば大多数の人の力になれると考えたのだろう。

「だが、冒険者ギルドは今ガタガタだろう。まともに活動できるのか？」

冒険者ギルドの本部機能が移転した先のキャナル王国は今、内乱の真つ最中だ。

一時はそれで大混乱に陥り、現在は少なくとも表面上は正常な状態を取り戻しているように見えるが、裏がどうなっているかはよく分からない。

「うん、この前聞いたんだけど……サイラス帝国に再移転したらいいんだ。それで本部機能が正常に戻ったらいい」

「そうか」

アインが頷き、屋根の上には沈黙が訪れる。

ホウ、ホウと鳴く鳥の声だけが響き……やがて、アインが口を開く。

「まあ、何にせよお前の選んだ道だ。私が……」

「アイン」

私が口を出すことじゃない、と言いかけたが、カインの言葉で遮られる。

「……僕の、パーティーメンバーになつてくれないか？」

その言葉に、アインの思考が停止した。

「今すぐ返事してくれなくてもいいんだ。ちょっと考えておいてよ」

そう言い残すと、カインは微動だにしないアインを置いて去っていった。

2

「くっ……風よ！」

「遅えっ！」

仮面をつけ白い衣を纏った男の輝く剣が、アインを斬り裂く。

カインが去った後、突如として襲撃してきた男。正体を隠してはいるが、この剣術は神殿兵だろう。

普通であれば、アインが人間などに後れをとることはない。しかし、この男は明らかに人間の域を超えていた。

激しい痛みとともに、アインの中から力がゴツソリと抜けていくのが分かる。男の魔法剣に秘められた強大な魔力が、アインの中の魔力を削ったようだ。

「ぐっ……ああっ……!？」

「トドメだ！……つて、うおおっ!？」

再度剣を振り下ろそうとする仮面の男を、突如飛来した光線が掠めた。

それを回避した仮面の男の目の前でアインが屋根から転がり落ちていくと同時に、光線の飛来した方向から叫び声が聞こえてくる。

「兵士さん、こっちです！ 全身真っ白の変態が刃物で女の子に斬りかかって！」

「ん な っ……!？」

仮面の男が慌てて声とは反対側の方へと飛び降りると、桜色の髪の少女が現れる。

「こちらへ！」

「くっ……すまない、クウ！ 仕留め切れなかった！」

少女に手を引かれるようにして、仮面の男は路地裏へと消えていく。

男達の気配が遠ざかっていくのを確認して、先程兵士を呼んだ男はふうと安堵の息を吐いた。

「……アイン、アイン！ 大丈夫か!？」

「……ぐっ、カイン、か……」

「戦闘音が聞こえたから、慌てて戻ってきたんだ。間に合わなくてごめん！」

返答する前にカインはアインを抱え上げ、走る。

「私を助けるのはやめておけ……アレは恐らく、神殿関係者だ。お前の将来に、影響する、ぞ……」

「知ったことか！ ここでアインを見捨てたら……きつと僕は、何にもなれない！ それに……僕はまだ、答えを聞いてない！」

カインは叫び、路地裏を抜けて大通りへと出る。

通りがかった人が振り向いてギョツとしているが、カインには気にした様子もない。

困った奴だ、とアインは思う。それに、アインはパーティのことは断ろうと考えていたのだ。
「カイン……忠告するぞ。これ以上私に関わるな。お前が……不幸になるだけだ」

そう呟いて、アインは意識を手放した。

それに気づきながらも、カインは全力で夜道を走る。
襲撃者が何者かは分からない。

カインのハッターリで逃げたということは、襲撃を表沙汰にしたいくない何者かであるということは予想できる。

しかし、アインの言葉が引つかかっている。

神殿関係者——何故彼らがこのタイミングでアインを狙うのか。

アインが人に言えない事情を抱えているのは知っていた。

あえて詮索しなかったが、何処かの国の諜報部隊所属であろうという予想はついている。

しかし、アインはこの国で何か悪事をはたらくというわけでもなく、むしろこの国に害をなすアルヴァやゴブリンアサシンなどを排除しているのだ。カインもそれに協力してきたから、よく知っている。

だから、というわけではないが、カインは、アインの人となりはよく分かっているつもりだ。

いつでも冷静で、頼りになって。そのわりには妙なところで世間知らず。

そして……決して、悪人ではない。

「……!？」

ピタリと、カインの足が止まる。

大通りなのに、人通りが急になくなった。まるでこの一帯だけ人払いされたかのように、だ。

「権力者って、怖えーな。簡単に道の封鎖とかできちゃうんだからさ」

仮面の男が道の向こうから進み出てきた。

それを見て、カインはチツと舌打ちをする。

そうだ。相手が本当に神殿関係者ならば、こういう事態も想定するべきだった。

神殿守護騎士団の権威を使って、カインの進行方向を一部封鎖して人払いをしたのだ。

「背中のをいつを渡してくれ」

「断る」

カインは即座に答えて、辺りの気配を探る。

一人、二人、三人……あちこちに並ではない力を感じる。恐らく神殿守護騎士団だろう。

「うーん……困ったな」

仮面の男は本当に困ったようにそう言うと、どうしたもんかと言いながら頭を掻く。

「……まあ、説明するしかないか」

深い溜息をついて、仮面の男はカインに向けて一歩踏み出した。

「お前には可憐な女の子に見えてるのかもしれないけどさ。実はそいつ、魔族なんだよ。しかも、随分前からこの国に潜入していたらしい」

「……」

カインは、答えない。

それを驚愕^{きょうがく}ととったか、仮面の男はさらに一步近づく。

「驚くのも無理はない。俺だって何も知らなければ、お前と同じことをしたさ」

仮面の男は、カインに向けて手を差し出す。

「お前は騙^{だま}されてただけだ。何も悪くないさ。だから、そいつを渡してくれ」

「渡したら、どうするつもりだ？」

「心配するな。非道な真似はしないし、俺が許さない。俺を信じ……」

「殺すんだろ？」

カインの言葉に、仮面の男は返答に詰まった。しかし、すぐに困惑した声色で言葉を紡ぐ。

「おいおい、だからそいつは魔族なんだよ。そんな姿してるからって、騙^{だま}されるなよ」

この世界に生まれ落ちてから今この瞬間まで、カイン・スタジアスには一度も曲げたことのない信念がある。

女の子を見捨てる男にだけは、絶対にならない。

その信念だけは曲げずに、突き進んできた。爵位が上の貴族の息子と決闘したこともあったし、凶悪な盗賊団のアジトに剣一本で乗り込んだこともある。

「アインのことは、君なんかより僕のほうがよく知ってる。アインは見た目通りの、可愛い女の子だ」

カインの言葉に、仮面の男はあちやー、と額を押さえる。

「困ったな、これ。どうすりゃいいんだよ」

「簡単だよ。君が、そこをどけばいい」

カインが睨みつけると、仮面の男はふうと小さく息を吐いた。

「……そりゃできないな。どうしてもお前がそいつを渡せないって言うんなら、俺は力づくで奪うしかない」

その言葉に、カインはアインをそつと下ろして横たえる。

「お、やっと分かってくれ……」

カインは黙って、腰の剣に手をかけた。

それを見た仮面の男は腰の剣に触れようとして、躊躇^{ためち}い……カインを正面から見据える。

「……やめろよ。それを抜いたら、冗談じゃ済まなくなるぞ」

「僕は最初から本気だ。君こそ冗談で済ませたいなら、お願いだからどいてくれ」

「できないって言ってるんだろ……なあ、頼むよ。魔族の脅威から人間を守るためにお前みたい人間と戦わなきゃならないなんて、冗談にもならねえよ」

カインは剣にかけた手を放さないまま、仮面の男を見つめる。

「大体、魔族は悪だなんて……その前提からおかしいだろ」

「おかしかねえよ。魔族に一度滅ぼされかけてるんだぞ？ どうして悪じゃないなんて思えるんだ」

「今は、ジオル森王国のように上手くやってる国だつてある」

「洗脳されてる可能性だってある。過去の魔王は、そういう力を持っていたって話だろう？」
そこまで言つて、仮面の男はハッと息を呑んだ。

「……そうか。お前が洗脳されてる可能性もある、か」

「どうしてそんな結論になるんだよ」

カインは溜息をつきながら、仮面の男との距離をとった。

対する仮面の男も、ここでもうやく剣に手をかける。

「……最後に聞くぞ。そいつを置いていく気はないか？」

「ない」

「そうか……残念だ！」

仮面の男は言うと同時に剣を抜き、カインの眼前へと迫る。そして剣を振ると見せかけて、蹴りを放った。

しかしカインはそれをあつさりと回避し、横薙ぎに剣を振るう。

「うおつとお!? 危ねえ！」

上体を反らして避けた仮面の男は、バランスを崩し、たたらを踏む。

「……くそつ、本気で剣振つてきやがったな！」

「当然だろ……今さら何言つてるんだ!？」

カインの追撃をいなしながら仮面の男は下がっていき、数撃目で、思い切り後方へとジャンプ

する。

「そっちがそういうつもりなら仕方ねえ……！」

仮面の男は再度剣を構えると、猛スピードでカインへ突進する。

「でえりゃあ！」

ガオン、という凄まじい音とともに放たれた一撃を、カインは剣で受け流すようにして回避。

オウガも上回るほどの重い一撃に、カインの腕に受け流しきれなかった衝撃がビリビリと伝わってくる。

確かに凄まじい身体能力を持っているが、剣術は並だ。

しかし、どうにも拭えない違和感がある。まるで自分の力を扱いきれていないような、そんな感じだ。

一撃ごとに、仮面の男の剣閃が鋭くなってくる。

「お前……マジで強えな」

「お褒めにあずかり光栄……だね！」

一瞬の隙について、カインは仮面の男の腹に蹴りを入れた。

かなり力を入れたのに仮面の男は吹き飛ばず、数歩下がっただけで再びカインへと向かってくる。が、それで問題ない。

「電撃！」

「があっ!？」

カインの掌から放たれた電撃が、仮面の男に命中し痺れさせる。当たっても死ぬことはないが、しばらく動けないだろう。

カインは剣を下ろし、ようやく一息ついた。

「悪いね、しばらく寝てもらうよ」

「お前が、な！」

動きを止めたかに見えた仮面の男。

しかし、仮面で表情が読めなかったことがカインの油断を誘った。

男は、驚いて動きを止めただけに過ぎなかったのだ。

それにカインが気づいた時には、凄まじい威力の蹴りが叩き込まれていた。

「ハッ、お返した！……電撃！」

仮面の男の放った電撃は、本人の想像以上の威力となって放たれた。

人間であれば一撃で黒焦げとなってしまうような稲妻。

その電撃が自分に襲いかかってくるのを、カインは見る。

電撃に限らず、電撃系の魔法はとにかく速度がある。事前に魔法障壁を張っていなければ、防げないほどに、だ。

だから、カインには理解できた。

防げない。

相手を行動不能にできなかった、自分のミスだ。でも、せめてアインは――

そう考えて背後へと視線を送った時、迫ってくる一つの影をカインは見た。

その影は、怒りの表情とともに槍を投げ放つ。

カインの眼前の地面に突き刺さった槍に、仮面の男の電撃が命中。

電撃の全ては槍を通して、拡散して消えていく。

驚いた様子の仮面の男とカインの間に進み出た少女は、地面に突き刺さった槍を引き抜いた。

「カインを探して走り回っていたら……何、この状況。アインは気絶してるし、カインは危機一髪だし。おまけに、全身真っ白の変態がカインを殺そうとしてるし。わけ分かんない」

「え……おい、お前どうやって此処に？ 此処は封鎖されて……」

呆然と呟く仮面の男に、少女は槍を向ける。

「強行突破したに決まってるじゃん。僕を誰だと思ってるのさ」

「え、いや……知らねえけど」

「あ、そう。でも君に名前覚えてもらう必要もないか」

ザッ、と進み出た少女――セイラ・ネクロスは槍を構え直し、仮面の男へと向ける。

「僕はカインみたいに優しくないんだから。指の数本で済むと思わないでよ？」

槍を構えたセイラの纏う^{まと}空氣が研ぎ澄まされていき、仮面の男は明らかに動揺した様子を見せる。
「お、おい。ちよつと待てよ。流石^{さすが}に普通の女の子相手つてのは……」

「問答……無用オ！」

セイラの槍が突き出され、仮面の男は慌ててそれを迎撃した。

だがその次の瞬間には、新たな一撃が仮面の男に襲いかかる。

次から次へと繰り出される槍の連撃。段々と速度が上がっていくものの、仮面の男はギリギリでそれを迎撃し続ける。

仮面の男が徐々に速度に慣れ始めた、その瞬間——突如槍の連撃は途絶え、横薙^{よこな}ぎの一撃が襲いかかってきた。

いくら刃がない部分とはいえ、総金属製のセイラの槍で殴られるのは棍棒で殴られるのと同じだ。
「ぐがつ!」

不意を突かれた一撃に、仮面の男は思い切り地面を転がる。

「いってえ……って、うおっ!」

自分を突き刺そうとするセイラの追撃を転がって避けながら、仮面の男は何とか立ち上がって体

勢を整えた。

「ちよ、ちよつと待て!」

「何さ、命乞^{いのこ}い?」

「そうじゃない! お前、事情を分かってないだろ!」

仮面の男の言葉に、セイラは何を言っているのかと言いたげに首を傾げる。

「事情も何も。そんな変態丸出しの格好で言い訳のしようがあるの?」

「こ、これは別に俺の趣味じゃ……って、そんなのはどうでもいい! その男は、邪悪な魔族に騙^{だま}されて俺と戦ってたんだけ! 俺はそれを救うために……」

「ちよい待ち」

仮面の男の台詞^{せりふ}を、セイラが遮る。そして槍を仮面の男に向けたまま、んー、と唸^{うな}った。

まずはカイン、そしてアインに視線を向け、最後に仮面の男に視線を戻す。

「何処^{どこ}に邪悪な魔族つてのがいるの?」

「その女だ!」

「セイラ、それは……!」

仮面の男の言葉に声を上げたカインを手で制すと、セイラは再度、んー、と唸^{うな}る。

それを説得の見込みありと感じた仮面の男は、力一杯、身振り手振りを入れながら叫ぶ。

「その邪悪な魔族がこの町で何を企んでいたかは、まだ分からない! でも、何かが起こってからじゃ遅いんだ! 俺に協力してくれ! それが最終的にはその男のためにもなるんだ!」

「うん、大体分かった」

「なら……！」

近づいて来ようとする仮面の男に、セイラは槍先を向ける。

「やっぱり君が悪いじゃん。つか、何企んでるか分からないけど、邪悪とか意味分かんないし。僕、そういう神殿の考え方って嫌いだな」

「な、何を言ってる……」

「君が君の正義で動いてるのは分かったよ。でも、君が何も考えてないのも分かった。これ以上やるなら僕はセイラ個人じゃなくて、ネクロス公爵家の娘として戦わなきゃいけなくなるよ？」

「それは困りますね」

セイラに答えたのは仮面の男ではなく……路地から出てきた、一人の少女だった。

柔らかな笑みを浮かべた桜色の髪の少女に最初に反応したのは、カインだった。

「……先輩？」

「こんばんは、カイン君」

クウエリア・ルイスティル。アルトリス大神殿の神官長の娘にして、エディウス冒険者学校でのカイン達の頼れる先輩だ。

その姿を目にして、カインはほっとした顔をする。クウエリアならば、この場を収めてくれると思ったのだ。

「どうでしょう、セイラさん。この場は私に免じて、お開きにするというのは」

「……お開き？」

「ええ。こちらの方はその魔族を今日のところは諦めて、カイン君達も今日のことはなかったことにする。それが、一番静かに終わる解決方法だと思うのですが」

何かを言おうとするカインの口をセイラが素早く塞ぎ、クウエリアへ向けて笑いかける。

「随分と神殿側に都合良く聞こえますけど。わざと言ってます？」

「あら、気に入らないところがありました？」

「ええ、ありましたね。カインとアインの怪我損じやないですか」

「勿論、カイン君の怪我は神殿で責任を持って治療しますよ？」

「……ふーん？」

クウエリアと笑顔を向け合っていたセイラはカインへと振り向くと、ニコリと笑う。

「カイン、帰ろっか。アインは背負える？」

「あ……うん。でも……」

「いいから、いいから」

セイラはカインを促しながら帰る支度を始め、その様子を仮面の男は悔しそうに見守っている。

やがてカインがアインを背負い終わると、セイラが先導して仮面の男の横を通り過ぎた。

そしてクウエリアの横を通りかかった瞬間、セイラはボソリと囁きかける。

「クウ先輩が黒幕でしょ？」

「何のお話でしょう？」

再度笑みを交わし合い、セイラはそのまま通り過ぎて、アインを背負ったカインも後に続いた。二人は人のいない大通りを進んでいき、やがてセイラが口を開く。

「で、僕まだ状況を全部かつてるわけじゃないんだけど。アインが魔族ってのは本当なの？」

「ん……んー、本人から聞いたわけじゃないけど」

「ふーん。まあ、色々と納得できる部分はあるかな？」

言いながら自分の前を歩くセイラに、カインは躊躇ためらいがちに声をかける。

「あの、さ」

「何？」

「もしアインが本当に魔族だったら……セイラはどうする？」

その言葉に、セイラはピタリと足を止めて振り返る。

「別に何も？ 僕だって魔族の知り合いくらいなら、いないこともないし」

「え？ いるの？」

「知ってるだけけどね。なんかルーティ先生とかネファスとかと仲いいみたい」

「え、ええっ!? 初耳だよそれ！」

かつて魔王シクロウス、そして大魔王グラムフィアを討った勇者パーティーの一人であり、エデウス冒険者学校の前理事長ルーティ・リガス。

そして、自分達と同じくエデウス冒険者学校に通っていたのに、突然、風の神殿騎士になったネファス・アルヴァニア。

その二人が魔族と仲がよく、セイラも知り合いということに驚愕きょうわくするカインへ、セイラはニヒつと笑う。

「まあねえ。女の子は秘密が多いのさっ」

「ええー……」

不満そうなカインに、セイラはニヤニヤと笑みを返した。そしてその笑みを、ふっと消す。
「けど、どうすんの？ たぶんあの白変態、明日以降もアインを狙ってくるんじゃないかな」

「や、やっぱりそうかな……」

「そりゃそうでしょ」

カインはうーんと唸うなりながら、それでも歩みを止めない。

次第にポツポツと大通りに人が戻り始め……ザワザワと喧騒も広がっていった。

「封鎖も解いたみたいだね。一応約束は守ったわけだ」

セイラがつまらなそうに鼻を鳴らし、カインはほっと息を吐く。

「とにかく、まずは僕の家……」

「あー、カイン見つけた！」

カインの台詞せりふを、突然聞こえてきた声が遮る。

それと同時に、冒険者学校の友人シャロンが正面から杖を抱えて走ってくるのが見えて、二人は足を止めた。

「もう、私を置いていたらヤダって言って……って、ええっ!? アイン!? え、何、どうして!?

ねえ、何があったの!？」

カインに困ったように見られ、セイラは肩を軽く竦める。

「え、えっと。シャロン、後で説明するから。とにかく、僕の家に行こう?」

歩き出したカインに宥められ、シャロンはアインを心配そうに見つめながらついていく。

さらにその後ろを続いていたセイラはビタリと足を止めて、独り言のように呟く。

「それ以上ついてきたら、本気で政治問題にするからね。まあ、その前に僕が大騒ぎするけど。いいのかな?」

言い終わると同時に、セイラの感じていた複数の気配は遠ざかっていった。

そのまましばらく何かを確かめるようにすると、セイラはふっと笑い、独り言ちる。

「……アインのことで手一杯なのかもしれないけど。カインもまだまだだよねえ。やっぱり、僕がついてあげなくちゃ」

「あれ? おーい、セイラー?」

前方から聞こえてきたカインの声に、セイラは精一杯の笑顔を向ける。

「あ、うん! ごめんごめん!」

パタパタと走ってセイラはカイン達に追いつき、隣りを歩き始めた。

4

額に冷たいものが載せられる感触。

覚醒した意識は気絶する直前の状況を思い起こし、素早い状況把握を脳に要求する。

結果、アインは飛び起きた。

「きゃあっ!？」

「うおっ!？」

自分の顔を覗き込むようにしていたシャロンとぶつかり、視界に火花が散る。

一方のシャロンも、ぼてんと尻餅をついた。

「つつ……シャロン? くそ、此処は何処だ。今はいつだ?」

「え? えーと……アインがベッドで寝てから一刻も経ってないよ?」

「……そう、か」

つまり、さほど時は経っていないことになる。

身体を見ると、傷は完全に塞がっていた。誰かが魔法で治してくれたのだろう。

「で、此処は何処だ」

「ん、と。カインの家、かな」

言われてみれば、見覚えがある。確か、カインが何か人助けをして手に入れた小さな家だったか。

「あの、馬鹿者め……! そういえばシャロン、お前は どうして此処にいる」

「え? えっと……アインが心配だったから」

「そんなことを言っている場合か！ 私が此処にいては、お前まで巻き込んでしまうんだぞ！」
「ちょっと、何騒いでんのさ」

言い合いを耳にしたセイラが扉を開けて姿を見せると、アインは脱力してベッドに座り込んだ。

「お前もか……いや、カインの家という時点で予想はできたか」

「心配しなくても、僕達四人だけだよ。カインは下でご飯作ってる」

「え!? て、手伝わなきゃ!」

パタパタと部屋を出て行くシャロンを見送ると、セイラはアインへと視線を向ける。

「ま、今さらだと思うよ。僕なんか、あの白変態にがつつりケンカ売ったしね」

「……そうか」

「あ、ひどっ。シャロンの時と全然反応違うし」

冗談めかすセイラに、アインはふっと笑った。

「それより、私が気絶した後に何があった」

「んーと、白変態が神殿の力で道を塞いでカインを虐めてたから、僕が割って入った。あとは色々あって、めでたしめでたし。つーか、僕だって途中参加なんだってば。何があって、ああなったの?」

それを聞いて、何となくアインは事情を理解する。

つまり、アインが気絶した後に戦いか、追撃か……どちらかがあったのだろう。

そして、どうやらセイラも巻き込んだようだ。

「……そう、か」

「つーかさ」

考え込むアインの顔を、下からセイラが覗き込む。

「あの白変態が、アインを魔族だの何だのって言ってたけど」

「それは、は……!」

言葉に詰まるアインの耳に、再び扉を開ける音が響く。

「あ、アイン。目が覚めたとは聞いてたけど……大丈夫?」

湯気の立つ皿をトレイに載せて入ってきたのは、カインとシャロン。

カインは手に持っていたトレイを近くの机に置き、アインに近寄っていく。

「……まずは、礼を言う。ありがとう」

「いや、別に礼を言われるほどの……うわっ!」

言い終わる前に、アインはカインの胸倉を掴み引き寄せた。

「……だがな、私は言ったはずだぞ。これ以上私に関わるなど。それが何だこの状況は。セイラを巻き込んで……シャロンまで危険な目に遭わせる気か?」

「いや、でも……」

「ちょ、ちよつとアイン……」

止めようとするセイラを睨んで黙らせると、アインはカインを正面から見据える。

「いいか、カイン。遠回しに言っただけなら具体的な言っただけ。私は魔族で、仕事で